

3月1日

劔の問題

(サムエル後書2-4)

「劔永遠に滅ぼし得んや、汝知らずや竟には怨恨たらんのみ」(サム後

二・二六上)

サウルとヨナタンがギルボワの山で仆れたので、ダビデの上に新しい歴史的使命がいよいよ臨んできた。サウルの執拗な追跡を避けてベリシテのガザ市のアキシ王のもとに家臣の如く身を寄せていたダビデは、エホバに伺いを立てた。「ヘブロンへ上れ!」との聖旨により遙か東方の山地、祖国ユダのヘブロンを城市とした。しかしそれでベリシテの支配圏からぬけされたわけではない。また北方サウル家には愚鈍なイシボセテが主将アブネルの力によって北方諸部族の王として君臨していた。それで北のイスラエルの宿将アブネルと南ユダの勇将ヨアブとがエルサレムの北西ギベオンに於て対陣し、やがて白兵戦となる。勝利はヨアブの側にあつたが、アブネルはヨアブに呼びかけて、「劔で永遠に滅せようか。貴台は知らないのか、結局怨恨が残る」と言つた。この一言は余韻がある。戦は悪循環で尽くるところを知らない。これが要するに世界戦争史の実相である。世の終末はかくしていつか来る。人類は自ら神の大審判を招く。「劔は劔で亡びる」とはキリストの言であつた。

アブネルは北イスラエル諸族がダビデの治下に入るを善しと視て、ダビデにその旨申入れた。アブネルは帰途、ヨアブの部下に殺害された。アブネルの死を知つたダビデは深く悲しみ、篤く彼を葬つた。人情の熱いダビデの人間性はここにも現われた。

3月2日

神の櫃と踊るダビデ
(サムエル後書5-6)

ダビデは力を尽してエホバの御前に踊った (サム後六・一四上)

ダビデはさきにヘブロンに於て苻灑がれ、ユダ部族の王になったが、北方のイスラエル諸部族が彼を訪ねて、「視よ我らは汝の骨肉なり」(五・一)と言って彼に苻を灑いでイスラエルの王にもした。かくてダビデはユダ・イスラエル全部族の王となった。時に若年三十歳。

ダビデはヘブロン王城に七年半、いよいよエルサレム先住民エブス人と一戦交えねばならない。エルサレム・シオンは難攻であるので、エブス人はダビデに「汝は此処に入る」と能はじ、反て盲者跛者汝を追ひ払はん」と侮辱した。勇将ダビデはこれを見事に攻略した。さてこのダビデの都に迎へるべきものは何か。神の櫃である。西方山地のキリアテヤリム(バアレユダ)に祭司エリの時以来何十年と放置されていた神の櫃をとり出してわが国のお神輿の如く運び出したときダビデとイスラエル全家は種々の楽器を奏して力を尽して歌いエホバの面前(神の櫃に臨在する)で踊った。しかし、神の櫃はベリシテのガテ人の所に三ヶ月ほど預けた。かつてのベリシテの恩義を感じたからである。いよいよダビデの都に入るやダビデはまた力を尽して神のみ前に踊った。それをダビデの旧き妻ミカルが見て、遊蕩者のように臣僕婢女の前で膚を露出して躍るとは、といて侮した。ダビデはこれに対して、自分は遊蕩者や遊女より賤しい者だ。ただエホバをお迎へできる歓喜で我を忘れて躍ったのだと答えた。ダビデの天真爛漫な全身的な歓呼を神は嘉し給うた。

3月3日

エホバ
実存主は幕屋、ダビデは王宮
(サムエル後書7)

「私はイスラエルの子らをエジプトから導き出した時から今日に至るまで、家に住んだことなく、ただ天幕と幕屋に宿りながら歩んで来たばかり。」(七・六)

エルサレムの名は紀前十四世紀の頃アマルナ文書にウルサリム即ち平安の都という名称で出現している。シオンの丘を東部にもった都で、東にはキデロンの谿谷が流れ、西から南にかけてヒンノムの谿谷が流れて南で合流している。しかもギホン(乙女の泉)(王上一・三三)、後に「ベテスダの池」(ヨハネ五・二)と謂われた間歇泉あり、エンロゲル(ヨブの井泉)あり(王上一・九)で、まことに自然の要塞を形成している。ダビデが此処に遷都し、永遠の都たらんとの大願をもったのは、歴史的摂理であった。香柏の宮殿には多くの妻妾をかかえたことは東西古昔の帝王らしいことでもあった。

さてしかしエホバ神の櫃を如何にすべきか。これを時の預言者ナタンにダビデは訊ねた。ナタンはその夜エホバの御言を聴いた。それが右掲の神の言であった。即ちイスラエル民族の神は歴史を導きつつ歩んでやまない神で幕屋を張っては畳み、畳んでは張って動きゆく生ける神であるとのこと。であるから幕屋で結構だという神意である。ダビデはこの神意を承って、この動的な生ける神に切々と祈っている(七・二七―二九)。とかく宗教が神殿化し寺院化して固定するところに形骸化の弊がある。このエホバ神の言に新約の黙示録は更に絶対次元的な質を以て応えている。神の都の中には宮がなく、神と羔(キリスト)がその宮であると(黙示録二一・二二)。

3月4日

ダビデとバテシバ

(サムエル後書11)

黄昏^{たそがれ}にダビデ、王宮の屋上を歩いていたが、一人の婦人^{おんな}が水浴して
いるのを見た。その婦人^{おんな}の容姿^{すがた}は極めて美しかった。(サム後二・二)

ダビデはベリシテ、アマレク、エドム、モアブ、スリヤ等四隣をことごとく征服して今やヨルダンの東の方^{かた}アンモン討伐にかかっていたが、これは宿将ヨアブ^{よあふ}に任せて、自分はエルサレムの宮殿にいた。するとある夕暮のこと屋上から艶麗な人影が水浴しているのを見てしまった。それはエリアムの娘バテシバで先住民ヘテ人にして部将たるウリヤの妻であつた。帝王や大名によくある如く、ダビデも彼女を呼び入れて寝てしまった。彼女は家に帰つたが、子を孕んだ旨をダビデに告げた。

ダビデは戦地の將軍ヨアブにウリヤを一時返すように命じた。ダビデはウリヤに家で休養をとることを命じた。しかしウリヤは戦時中とて王城の一角に二夜を明かした。三日目の朝ダビデはヨアブへの親書を持たせてウリヤを戦場に返した。その親書の内容はウリヤを激戦の前線に向わせて彼を戦死させろ、というのである。ことはその通りになった。夫君の戦死を悲んだ妻バテシバは一定の期間喪に服し、ダビデに召し入れられ妻の一人となつた。「ダビデ、ウリヤの妻たりし女によつてソロモンを生み」と、キリストの系譜にある如く(マタイ・六)、ダビデの大きな姦淫の罪を通してすら、多くの妻妾の中の撰びの女性となつた。ウリヤの犠牲に於て!

3月5日

ダビデと預言者ナタン

(サムエル後書12)

ナタン、ダビデに言ふ「汝はその人なり！」(サム後二・七)

ダビデ「我れエホバに罪を犯したり」。ナタン「エホバまた汝の罪を除き給へり」(二・三)

エホバ知り給う。預言者ナタン神から遣わされ、ダビデに言うにはある富者が多くの羊や牛を有っていた。ある貧者は牝羔一頭しかなかったが、これを自分の娘のように愛して育てた。ある旅人がその富者を訪ねて食を求めた。富者はその貧者の牝羔を奪い取ってこれを旅人の為に煮て喰わせた。ダビデはこれを聞いて、「エホバ生き給う〔誓の表現〕、まことにそんなことをした男は死の子〔死に価するの意〕である！」(二・五、六参照)。言下にナタンはダビデに言った「貴殿こそその人だ！」(原語では「汝、其人！」アッター、ハー・イーシュ！)(二・七上)〔詩篇五一参照〕

ナタンはこの言のあとでなお神の厳肅な言を切々と語っている(サム後二・七下—二)。これを聴いてダビデは心臓を刺される想いであった。それでナタンに平伏して告白した、「私はエホバに対して罪を犯しました」。その懺悔の相を見てナタンは言った、「エホバまた貴殿の罪を除き給うた。貴殿は死なずに済む。だが貴殿に生れる子は死を死ぬ〔必ず死ぬの意〕と。その子が生れてから、ダビデは断食して六日間地に臥して祈った。しかし七日目にその子は預言の如く死んだ。ダビデは起きて身を潔め衣を更えてエホバの幕屋に入って謝罪の祈りをした。子はダビデの死罪(レビ二〇・二〇)の贖いをしたわけであった。この次に生れたのがソロモン〔シェローモー「平安」の意〕で、エホバはこの子を愛し給うたのでその別名イエデデヤ(「神の愛する者」と称われた。

3月6日

ダビデとアブサロム

(サムエル後書13-18)

民いふ「汝は出づべからず、彼らは我らに心をとめじ。されど汝は我らの一万に等し」(二八・三)。

王、門の樓上にて慟哭せり「我子アブサロムよ、噫我汝に代りて死にたらんものを」(二八・三三)。

美しい妹タマルの為に異母弟アムノンを殺害して父ダビデの目を避けていたアブサロムには既に或る野心が萌していた。眉目秀麗才氣無雙の御曹子アブサロムは藍より出でて藍より紺き王子であった。人心は彼に服し、父王の讒官アヒトベルは既に橐籥の中にあった。彼は期を謀って父を詐り、その間密偵を遍くイスラエルの支派に遣わした。子を信じて、「安らかに往け」と祝したダビデであった。ときならぬ角笛の響きはヘブロンの上に戦雲を捲き起した。乱臣賊子のため無比の勇王ダビデも今は都を落ちゆく敗者となった。

アブサロムとは「父は平安なり」との意なるに愛の絆は反逆を以て断たれつつある。反逆の嘲笑が皮肉にも古き罪業の疵痕と現実の流落の身を喰むとは。けれどもダビデの神信頼は暗雲を貫いて臨む神の聖手を体感するのである。牧場の牧童時代から波瀾重畳絢爛多彩の生涯を今まで導き給うた力強い愛の神にダビデは詩篇第三篇の祈りを捧げた。

流浪の王に忠臣が現われた。ガテのイッタイである(一五・二)。その心は「海ゆかば水つく屍、山ゆかば草むす屍」のそれである。アヒトベルの計策は神これを愚かならしめた(二七・二四)。戦運逆転、アブサロムは遂に戦死する。かつて追跡者サウルの戦死を悲んだダビデは今や反逆兒アブサロムの戦死を愛惜する。敵を愛せしダビデよ！

3月7日

ダビデ辞世の歌

(サムエル後書23)

一 是らはダビデの最後の言。エサイの子、ヤコブの神に膏灑がれし者（メシヤ）、イスラエルの美しき紋歌人の辞なり。

二 エホバのみ霊わが中に在りて語り給ふ 彼のみ言わが舌の上に在り。

三 イスラエルの神語り給ふ イスラエルの岩我れに宣給ふ。

四 人を美しく治むる者 神を畏れて治むる者は

陽の照る晨の光の如く 雲なき晨に

雨後の耀きにより 地より萌え出する若草の如し。

五 げにわが家は神と共に此の如くならずや。

げに彼は永遠の契約を万事整へ定めて我と結び給へり。

さればまたわが救と願ひをすべて叶へ給ひしに非ずや。

六 されど邪悪なる者は荆棘の如く すべて投げ棄てられん。

手にて採り得ざるものなればなり。

七 彼らに触るる者は鐵と槍の柄にて武装せよ。

彼らは遂には火にてその場に全く燃え尽きん。

ダビデは紀前九七〇年の頃生れ、三十歳で王位につき、ヘブロンを都として七年間、エルサレムに遷都して三十三年間、外征内治、縦横無尽の活躍をなし、紀前九〇〇年頃に召天した。彼は英雄にして詩人、楽人、政治家にして王者。イスラエルの象徴と謂わん。ダビデは実に人間性の豊かな人物。波瀾万丈の生涯を、勇猛果敢な行動、烈しい情熱、深い思慮篤い思い遣り、矛盾をもった調和となし、一貫した神信頼に生きた。

3月8日

ソロモンの智慧
(列王記略上3:4:29-34)

「我汝に賢明にして叡知なる心を与ふれば、
(王上四・二九―三四参照)

汝の先には汝の如き者なく、汝の後にも汝の如き者興らざるべし」

(王上三・一二)

第一代のサウロ王(一〇二〇―一〇一三)、第二代のダビデ王(一〇一三―九七二年)の後継者たるソロモン王(九七二―九三二)は、美妃バテシバがダビデに生んだ子であったが、ソロモンはイスラエルの黄金時代を現じた。

ソロモン、エルサレムの北西ギベオンで燔祭をした。ある夜エホバが夢に現われて、ソロモンに何を求めるかと訊ねると、ソロモンは民が夥しく多いから、善悪を弁別する智慧が賜りたい旨を申した。神はソロモンが長壽も富有も戦勝も求めないで、民を治める智慧を求めたのを嘉して、望みを叶えてやる旨を告げた。これは正に靈夢であった。

早速ある裁判をすることになった。それはこういう事件だ。二人の娼婦があつた。そのA女とB女は同棲していたが嬰方に子が生れた。両者は枕を並べて寝ていたが、B女が夜自分の子の上に臥してこれを圧死させた。するとこのB女はA女の胸の子と自分の死んだ子をすりかへた。そのことにA女は気づかなかつた。朝起きて乳をのませようとしたら、その子は死んでゐるではないか。よく見ると自分の子でなくB女の子なのだ。王の前でこの二人は生きてゐる子が自分のだといって争う。王は家来に劔を持って来させて、その活きた子を二つに斬つて頒てと宣した。A女は叫んで、そんなことはしないで下さい。Bに与えて下さいといった。Bはどっちのものにもしないで斬つて下さいといった。王はこの活ける子はAの子だ、と判定した。神の智慧の顕現だ！。全イスラエルは王を畏敬した。



(王上3：16-28) ソロモンの知恵：二人の娼妓の例（ドレー）

3月9日

ソロモンの神殿

(王上5-8)

「視よ、天も諸々の天も汝を容れるに足らず。況んやわが建てたる此の家(神殿)をや。エホバよ、願はくは僕と汝の民イスラエルが、此処に向ひて祈る時に、汝は汝の居処なる天に於て聴き、聴きて赦し給へ。(王上八・二七・三〇)」

ソロモンは太平の世を迎えたので、ダビデの味方であつたツロの王ヒラムの好意により、レバノンの香柏や松の木材を以て神殿建設に協力してもらつた。木材伐採その他のための徴募人三万、荷負人七万、石切人八万、等々どれくらい数の労働者である。

エホバの家、神殿の境内は広く、大庭、内庭(宮殿の)、内庭(神殿の)、レバノン森の家、柱廊、審判の廊、宮殿、後宮、神殿、祭壇といった構成である。ソロモンはエホバの契約の櫃をダビデの城たるシオンから移して神殿の幕屋の至聖所に安置した。その上に贖罪所があつて、その左右から向ひ合つて翼を上へに伸ばしたケルビム(単数ケルブ「祈る者」の意)は橄欖の木で造つた。

ソロモンは、神がサムエルやダビデに告げられたこと、即ち神エホバが契約の櫃を臨在所として幕屋の中に、聖名に在つて靈在する動的な在り方の神であることは知つていた。であるから神殿は作つたが、靈として生ける神の本質を自覺して祈つた。そのことは右掲の祈りの言が瞭かに表している。王上第八章にいろいろな場合と内容の祈りが書かれてあるが、必ず「汝天に於て聴き給へ」と言っている。超在と臨在の神秘の現実である。

3月10日

ソロモンの背神

(王上10:11)

エホバ、ソロモンを怒り給へり。そは彼の心イスラエルの神エホバより反れたればなり。(王上一・九)

ソロモンは智慧と富有に於て天下の諸々の王より大であつた。まことに榮耀榮華を極めたのであつた。アラビヤの南部シバの女王がその名声を聞いて豪華な賜物を積んで彼を訪ねた。さすがの女王も豫想を越えたソロモンの智慧と財富に氣を奪はれた(一〇・五)。

ところが彼の魂を奪つたものこそ、この現世の財宝と、東西の帝王によくあつた妻妾である。彼は即ちモアブ、アンモン、エドム、シドン、ヘテ等四隣勢力下の多くの美女を後宮に容れ、寵愛した(一一・一)。彼の妃女は七百、嬪女は三百。外国の女に魂が奪はれると、その次に結果するものは何か。それらの女の拝む神々に魂がゆらいで行くことである。ソロモンの智慧も曇ってしまった。シドン人の性愛の女神アシタロテ、アンモン人の偶像モロク、モアブ人の偶像ケモシ等のいやらしい神々に心が移り、エルサレムの東オリブの山に偶像を立てる崇き壇を築いた。ソロモンの魂のかかる墮落転落はエホバ神の怒を招いた。

「それでエホバはエドム人ハダテを興してソロモンの敵(サタンという語)となした」(一一・一四)。ハダテはダビデの勇将ヨアブにエドム軍が全滅的にやられたとき、辛うじて遁れてエジプト王の許に圜はれていたが、王妃の姉と結婚していた。一方ソロモンの臣僕ヤラベアム叛旗を翻し北なるイスラエル王朝第一代の王となった。他方ソロモンの子レハベアムは後を継いで南なるユダ王朝第一代の王となった。ソロモンが仆れたのは紀前九三二年であつた。

3月11日

エリヤと鴉^{からす}、エリヤと寡婦^{やもめ}
(王上17)

○鴉^{からす}が朝にパンと肉を、夕にもパンと肉を彼の許に運んだ(王上二七・六)。
○其の桶の麦粉は竭きず、其の壺の油は絶えない(王上二七・二六)。
○「エホバわが神よ、この子の魂を哀に帰して下さい」(二七・二、三)。

ヨルダンの中流東部の山地ギレアデの山村テシベの出身エリヤ(原語エーリヤーフーわが神ヤハウェー)は預言者の召命を受け、北王朝アハブ王(八七五―八五四)に言った「イスラエルの神エホバは生く(誓の言)、わが言なき時は数年(三年半)露も雨もあらざるべし」と。彼は神命によってヨルダンの東側の支流ケリテ川のはとりに身を匿し、川の水を飲み鴉が運んでくれるパンと肉で露命をつないでいたが、旱魃のため川も涸れた。すると神は地中海沿岸シドンの南のザレバテへ往かしめ、異邦フェニキヤ人の寡婦のところへ彼を導いた。彼女は一握の麦粉と壺の中に少量のオリヴ油しかもっていない。彼女は自分も子供も餓死寸前だと言う。エリヤは「懼れるなよ」。雨が降るまで麦粉も油もなくならないよ、と言った。その通りであった。神のふしぎな恵みの力なのであった。それをエリヤは愛の祈りで体現したのである。

その後その子供が重病に罹った。そして氣息が絶えた。すると寡婦は言った。「神の人よ、あなたは私の罪を憶い出させ、子を死なせるために来たのですか」。エリヤはその子を樓上の自分の床に寝かせ、神に祈って三度び身を子供のの上に重ね、靈氣を吹き入れた。そして右掲の祈りをした。子供は甦った。エリヤは驚くべき神の人だ。この寡婦の魂も甦ったにちがいない。

3月12日

カルメル山上の靈戦
(王上18)

「^{一八・三六}アブラハム、イサク、イスラエルの神エホバよ、今日こそ知らしめ給へ、汝のイスラエルにおいて神なること、我が汝の僕にして汝のみ言に在^ミつて是等すべての事をなせることを。我に答へ給へ、エホバよ、我に答へ給へ。此の民をして汝エホバは神なること、及び汝が彼らの心を再び^{ひるが}翻へすことを知らしめ給へ」(王上一八・三六、三七)。

北イスラエル国第六代の王アハブは、フェニキアの王でバアル礼拝の祭司エテバアルの娘イゼベルを妃にした。イゼベルは氣の強い女でアハブはバアル礼拝に変へられてしまつた。エリヤは神の人の權威を以てアハブに面接し、「イスラエルに禍を招く者は我に非ず、エホバの神命を棄ててバアルに従ひたる汝と汝の父祖なり。」と逆襲し、バアルの預言者四百五十人とアシラ女神の預言者四百人をカルメル山上に招集するように要求した。エリヤは動揺している民衆にエホバかバアルか決断せよと促がした。エホバの預言者エリヤ一人に対してバアルの預言者四百五十人の信仰の決戦がカルメル山上で展開された。牡牛一頭づつを載り^さ剖いて夫々の薪の上に載せて、神に呼はり、火を以て応える神を神とする、というのである。バアル側は朝から午まで祈ったり、叫んだり、躍ったりしたがダメである。エリヤは嘲って、バアルは考えているのか、どこかへ行っているのか、眠っているのか等と言ひ放った。ついに日が暮れてもバアルは何の徴も見せない。そこで神の人エリヤは右掲の如く祈り叫んだ。俄然天来の火が降つて燃えた。民衆は連呼して叫んだ「エホバは神なり！」文字通りのハレルヤ(汝らエホバを讃め称へよ)の意)であつた。

3月13日

エリヤの遁避行
(王上19)

○彼金雀花の下に伏して眠りしが、天使彼に捫り「起きて喰へよ」。
○火の後に細き囁きの声あり、「汝何ぞ此処に居るエリヤよ」(この二節

王上一九・五、及び一二、一三)

アハブの王妃イゼベルは、カルメル山上の靈戰の敗北をアハブ王から聞かされて、サタンの彼女エリヤを殺害せんと謀る。エリヤは速かにカルメル山を降り、南に向つて遁走した。カナンの南端エルシバのあたりまで来た。曠野の中を更に一日路を歩いたら金雀花の灌木があつたのでその陰で憩うた。疲労困憊である。人間の弱さをそのまま「エホバよ、足れり、今わが生命を取り給へ」と言つた。しかしこの告白の中には、カルメル山上で神の降臨を身証して目的を達したから、いつ死んでも可いのだ、という平安もふくまれていたにちがいない。天使が彼を助けに來た。彼を揺り動かして「いざ起きて食へ。」見ると焼きパンと一瓶の水! 何たる美味ぞ。しかしまた眠つた。また天使が彼を覺ました。また食ふ且つ飲んだ。こんどはすっかり元氣を回復して、南下して神の山ホレブまで歩いた。

ホレブの山に烈風、そのあとで地震、そのあとで火。しかし神の臨在がない。そのあとで細き囁きの声が聞えた。耳を敬(や)むと「汝何ぞ此処に居るエリヤよ」との声である。

「我は万軍の神エホバの為に熱心熱誠なり。其はイスラエルの子ら汝の契約を棄て、汝の壇を毀ち、剣をもて汝の預言者らを殺したればなり。唯我一人残れるに彼らわが生命を取らんことを求む」と彼は答へた(王上一九・一四)。神は彼にダマスコへ往けと命じた。



(王上19:5, 6) 天使とエリヤ

3月14日

ナボテの葡萄園

(王上21)

「わが父祖の世襲地を汝に譲渡するは、エホバより我を離反せしむることなり (二・三)

北王国イスラエルの北部イッサカルの要害の地エズレルの人ナボテが葡萄園を有つていた。アハブ王の離宮に近いので、王は譲ってくれと言う。ナボテは右掲のように断つた。土地は本来神の有である、というのがユダヤ法の問題である(レビ二五・二三)。相手が王であってもナボテははっきり断つた。すると黒幕のイゼベルが、ラハブにエズレルの長老に宛てて親書を書かせ、エズレルに罪業のための断食を宣伝させ、ナボテを民衆の前に坐せしめ、邪惡な二人の偽証人を立てて「汝、神と王を詛ひたり」と言はしめ(出二三・二八、レビ二四・一四)、彼を曳き出だし、石でぶち殺せと、惡辣な奸策を実演させた。ナボテはこの惡女の犠牲となった。

ホレブ山上でエホバから力強く命ぜられてダマスコへ歸つて、その後の預言者としての活動をしていたエリヤに神の言が臨んだので、彼はイスラエル人の都サマリヤのアハブに面接し、エホバの審きの言を伝えた、曰く「犬ナボテの血を舐めし処にて犬汝の身の血を舐むべし。汝エホバの面前にて惡をなす事に身を委ねしに由り、我れ災害を汝に降し」云々と。アハブはスリヤとの戦で戦死し、車の中に流れた血を犬が舐めた(王上二二・三八)。その後奸女イゼベルは第八代の王となるエヒウ(八四二一・一五)の言により、窓から投げ落され、慘澹たる屍となった(王下九・三〇―三七)。エリヤの預言の通りであった。神は遂にこの惡女を鋭く審き給うた。

土地は神有にして国有たるべし。日本に於ける地価暴騰の現状を深く嘆かざるを得ない。

3月15日

エリヤの昇天
(王下1:1-2:12)

11 彼ら進みながら語っていた時、見よ火の戦車と火の軍馬と現はれて両者を隔てた。かくてエリヤは龍巻に乗って天に昇った。

12 エリシャ見て叫んで言った。「我が父、我が父、イスラエルの戦車よ、其騎兵よ！」けれどもまた彼を見なかった。(王下二:11、12)

アハブの後に立ったアハジヤ王が高樓の欄杆から転落して負傷したとき、使者たちをマリヤから遙か南西のエクロンの神バアルゼブブ(「羽虫の主」)に遣はして癒えるかを伺はせて下山せよと告げた。エリヤは「我れ若し神の人ならば……」といって、天から靈火を降して彼らを焼死させた。王はまた遣はしたが同じく五十名の使者が焼かれた。王はその不信のために遂に死んだ。

エリヤは正に火の預言者である。門弟エリシャと共にヨルダンの河口近いギルガルから出かけてベテルへ向った。途中で待っているといってもエリシャは「エホバは活く、汝の魂は活く(誓いの表現)、我は汝を離れじ」といつてどこまでも従いて往った。更にヨルダンに近いエリコに戻って、最後にヨルダン川の河原に來た。エリヤは外套を脱いでこれを巻き、水を打った。水は彼岸と此岸に分れた。二人はその中を涉った。エリヤは問うた、自分は今神に取られるが、何をしてもらいたいかと。エリシャは答えた。あなたのみ霊の二人分(實際は彼一人だから頒たれる全部)を私に遺して下さいと。そうか、すっかり受けとれ、とエリヤは遺言した。なほ進んで往くと右掲の如き驚くべきことが起きた。死を見ず姿を消したのは旧約のエノクとエリヤだけであるとは!



(王下2:7-14) エリヤの昇天 (ドレー)

3月16日

エリヤの衣鉢エリシャ

(王下2:13-18)

○「エリヤの神エホバ！ 何処に！」^{いづこ}「エリヤの霊エリシャの上に留まる」^と（王下二・一四、一五）原語エーリヤ・フーは「わが神はエホバなり」原語エーリシャは「わが神は救ひなり」

エリヤの身から落ちた外套を謂はば衣鉢のようにとりあげ、ヨルダンの岸に立つてエリヤの如くその衣で水を打った。と同時に「エリヤの神エホバ！ 何処に！」と叫んだ。すると水は彼岸と此岸に分れた。彼はそこを渉った。これを見ていた対岸の預言者の徒輩が、「エリヤの霊エリシャに留った」と異口同音に叫んだ。そしてエリシャの許に来て平伏してこう言った。貴下^{あなた}の主エリヤはエホバの霊にひきあげられてどこかの山か谷に放たれたと思うから、自分らの僕どもを探がしに遣らせて下さいと。何を馬鹿なことを言うか、とばかり拒んだが、余り執拗なのでなすにまかせた。三日間探ねたが見当らなかった。エリシャの処に帰って来て、ダメでした、という。エリシャはエリヤが火の如く靈化して昇天した事実を信じていたのだ。

この記事を読んで私は深く感動した。先づエリシャが受けとったエリヤの外套には神霊を受けたエリヤの霊がこもっていたこと。彼が「エリヤの神エホバ何処に」と叫んだ時、実は、神はエリシャの身を霊を以て抱いておられたこと。であるから、エリヤの場合と同じことが起きた。それで民間の預言者どもが、エリヤの霊がエリシャに留まった、と驚いて事実を告白した。

エリシャはエリヤの衣鉢そのものの如き存在となった。この師弟関係ほど深いものはない。エリシャは爾後神霊によるカリスマ（靈賜）的な能力^{はたらき}をしてやまなかった。

3月17日

エリシャの無尽の油

(王下2:19-4:7)

「往つてその油を売つて、その負債おひめをつぐのい、貴女あなたとあなたのお子達はその余分あまで生活しなさい」(王下四・七)。

○ヨルダン下流沿いの世界最低の位置たるエリコ(別名棕櫚の町)附近の水が悪いので流産を起こすということをエリシャは聞き及び、水源に塩を投げ入れながら「エホバかく言い給う、我れこの水を癒いす」と。爾後流産はなくなった。

○モアブの王メシヤがイスラエルの王ヨラム及びユダの王ヨシヤバテと対立し戦争となつた。そのときエリシャが相談を受けたが、彼はヨラムに、汝エホバ信仰なきに由り、我れ汝と何の関はりあらんやと断乎つづねた。ヨシヤバテは信仰熱き王だから彼のためなら応ずるといった。彼は楽人に神讚美の音楽を奏でさせて聖言を聴き、策を与え、神の力で勝たしめた。

○エリシャの門弟の一人が死んだ。するとその婦人がエリシャに、債主が自分の二人の子供を奴僕しもべにひきとろうとしている、といつて救を求めた。そこで彼は、家の中に何があるかと尋ねた。彼女は僅かばかりの油だけだと答える。では空からの器を隣近所から沢山借りて来て、家に子らと閉ちこもり、それらの器に油を少量づつ滴たらしなさい、と彼は告げた。この言に従つて油を滴らしたら、見よ、すべての器に油が満々と湛たえた! 驚き喜んで、女はこの神の人に告げた。するとエリシャは右掲みぎのりの如く語つた。キリストのカナの婚宴のときの神の愛の力を連想せざるを得ない。橄欖の油は聖霊の徴である。我らも聖霊を体受すると無尽の事態を体験する。

3月18日

エリシャとシュネムの石女
(王下4:8-37)

その子は死んで、自分の臥床ふしどに臥していたので、エリシャは戸を閉ぢてエホバに祈り、子の上に伏し、自分の口をその口に、自分の目をその目に、自分の手をその手に当て、身体からだでその子を掩おほつたら、子の身体が次第に温ぬくもつた。このように七度ななびやると、目を開いたので、エリシャは「汝あなたの子をつれてゆきなさい」と言った。彼女は入ってエリシャの足下に伏し、地に身を屈かがめ其子を取りあげて出て行つた。(王下四・三二・三三七)

エリシャはヨルダン下流のギルガルとエリヤの本城の如きカルメルの間をときに往き帰りしていたが、その途中のシュネムに富裕の老夫婦がいたが、婦人は石女イソトでこの神の人を懇ろに遇し、別室を備えて自由に宿らせた。子なきをエリシャは憐み、彼女にいきなり、「来年の今頃貴女は子を抱くよ」と言った。彼女は「ひとを欺あざむいてはいけませんよ」と応えた。ところが神の人の言の通りになった。その子は少年になった。刈穫時に炎天下で手伝っていたら、「頭が、頭が」と叫んだ。母の膝に抱かれたまま少年は死んだ。婦人は神の人の臥床ふしどに少年を寝かせた。彼女は驢馬に乗って神の人の許に馳せた。エリシャの脚に抱きついて、「エホバは活く汝の魂は活く、我は汝を離れじ」とのひたむきの信頼を告白した。彼女の体あたりの信仰を見てエリシャは一緒に彼女の家へ往つた。そして右掲の如く、自分の室に唯一人入って、神に祈り入って、少年を甦よみがえらせた。驚くべきあわれみの力である。婦人は感謝感激で言も出ない。足下に伏して少年を抱いて室から出た。

3月19日

癲病者ナアマンの信仰

(王下4:38-5:26)

○「かれら食うて尚あまりあらん」(王下四・四三)

○「汝ゆきて身をヨルダンの中にて七度洗ななたびへ、

さらば汝の肉元来もとに帰りて汝清くなるべし」(王下五・一〇)

○ギルガルの北西、バアルシャリシャから来た人たちが、初穂の食物として大麦のパン二十と畠の初物一袋の食物をエリシャのところにもって来た。そこにいる百人の人たちに食はせることは無理な話であるのに、神の人はこう言った、「エホバかく言い給う『かれら食うて尚あまりあらん』と」。正にその通りであった。キリストが五千人に五個のパンと二匹の魚から頒ち与えてなほ余りが十二の筐かごを満たしたという驚くべき創造の業の先駆的なものであった(王下四・四一―四四)。

○スリヤ王の武将ナアマンが癲病に犯された。敵国イスラエルのある少女がエリシャのことを語った。これが起因となって、ナアマンはエリシャのところへ駆せ参じた。神の人は使者をして右掲の如く言はしめた。ナアマンは神の人が按手して祈ってくれるかと思つたので、これを聞いて一度は怒つたものの、思い改めて、神の人の言の如くしたら、「嬰兒の肉の如く清くなった」。ナアマンは感激してエリシャの許に帰つて来て、面前で、「我れ今イスラエルの他は全地に神なしと知る」と信仰告白をした(王下五・一五)。エリシャが全く神の言を霊とし生命として、ただそれを全身で伝えている無的な在り方に信仰の奥義を見る。また武人ナアマンが、斯く鮮かに偶像教から活ける聖なる神に平伏したことは、あのローマの百卒長の信仰を連想させる(王下五・一二六)。

3月20日

神の人の武士道

(王下6:8-23)

「エホバ彼の眼を開きて見させ給へ」とエリシャ祈れば、エホバその若者の眼を開き給ふ。彼見るに火の軍馬と火の戦車山に満ちてエリシャの四面に在り。(六・一七)

エリシャ答へけるは「撃ち殺すべからず、汝剣と弓をもて捕虜にせる者等を撃ち殺し得んや。パンと水を彼らの前に備へて且つ食ひ且つ飲ましめてその主君に往かしめよ!」(王下六・二二)。

アラム(スリア)とイスラエルの戦が起きた。アラム王は評議して伏兵を置く地点を定めた。すると神の人エリシャはその事態を靈知してイスラエルの王にその地点を警告した。事の失敗を知ったアラム王は敵と内通する者あらんと思った。すると臣僕の一人が、さに非ず、預言者エリシャはこちらの密議を靈知する力をもっている。そこでアラム王はエリシャの所在を探知させて大軍を遣つてその町を包囲させた。これを知った一人の若者が怯えてエリシャに告げた。彼は言った、懼れるな、こちらの方がもっと大軍だよ。神の人には天の万軍が味方するのが見えている。その靈的現実が右掲の如き「火の軍馬と火の戦車」なのである。そこで彼はエホバに祈つて、敵軍の目を昏ました。エリシャは彼らに、汝らの道は此処ではない、城も此処ではない。私が導いてやる、といつてサマリヤ、イスラエルの都に伴れて行つた。彼らの目が開けられるとこんどは逆に敵中にあるのを彼らは見た。イスラエルの王は「わが父よ、撃ち殺さんか」と訊ねた。神の人は右掲の如く答えて、敵を憐れんだ。王は大いに饗宴を開いて彼らをアラムに返した。何たる愛敵ぞ!

3月21日

浮かぶ斧、死骨の力
(王下6:1-7; 13:20, 21)

○斧水に落ちたり。神の人枝を切りて其処に投げ入れ、その斧を浮かばしためたり(六・六)。

○その人をエリシャの墓に投げ入れて去れり。然るにその人エリシャの骨に触るるや甦りて起ちあがり(王下三・二)。

エリシャの門弟たちがエリシャを中心として住む家を建設しようとして、ヨルダンのほとりに出かけた。そしてヨルダンの岸で材木伐採にとりかかったが、ある男がふと大切な斧をヨルダン川に落した。さあ大変、みつからないのでエリシャにたのんだ。エリシャは落した場所を聞くや一つの枝を切りおとして、霊的透視を以て水中の見えない斧を目がけて力強く投げ入れた。次の瞬間、斧は枝に喰いついて浮びあがった。

生涯、大小許多のカリスマ的な神の業を成し遂げ、栄光をエホバの神に帰し貫いたエリシャ。エリシャの衣鉢を継いで藍より出でて藍より紺きエリシャであった。預言者は結局孤独である。本当の生命賭けの後継者だけが預言者を知るのみ。後継者は非連続的である。エリヤ、エリシャはむしろ例外的だ。

ところでエリシャも終に死して葬られた。ある人が葬られようとした。そのとき賊党が見えたので、その人はひそかにエリシャの墓に投げ入れられた。その投げ入れられた死者は、エリシャの死骨に触れるや、甦って起ちあがった！ 何たる霊骨ぞや！ エリシャは死して猶人を助けてやまざる神の人であった。然り、預言者たちも使徒たちも、聖霊のキリスト者たちも今もなほ神・キリストを身証してやまず。旺なる哉、神の国！

3月22日

神とサタンとヨブ（上）

（ヨブ記1：1-9）

サタン曰く「ヨブ豈求むるところなくして神を畏れんや」（ヨブ一・九）

カナンの南東エドムの北の方にウツの地があったが、ヨブという名のイスラエル人ではないセム人がいた。彼はその人と為り完く且つ正しくして神を畏れる人物であった。男子七名、女子三名、合せて十名の子らがあった。羊、駱駝、牛、牝驢馬をたくさん有っている所謂資産家カピタリスト（即ち畜群の頭数を夥しく所有する者の意）であって、多くの下僕も雇用していた。ヨブの生きていた時代は詳かでないが、族長時代と思はれる。但しヨブ記の書かれたのは、所謂智慧文学に属するので、文書預言者たち輩出の後期以降であろう。

さてある日、神の前に天使たちとサタンが待つて対談をした。エホバはサタンに、「汝心をもちひてわが僕ヨブを觀しや」と問いかけ、ヨブの上述の人がらを神自ら述べ給うた。するとサタンは「ヨブ豈求むることなくして神を畏れんや」と応えた。このサタンの「求むることなくして」が重大な問題を孕んでいる言葉である。ヨブが信仰深く間然するところない立派な実存というが、何か神様から応報を求めているんですよ。とサタンは言う。即ち人間はエゴイストだから、信仰といっても何か御利益を、幸福を、名譽を、財宝を、權勢を、地位を求めている信仰だといふのである。サタンは人間のかくれた根本衝動を衝いて神に抗弁している。実はそのエゴイズムの首魁はサタン自身であることをゲーテも『ファウスト』の中で指摘している（二六五—三行）。

3月23日

神とサタンとヨブ（中）

（ヨブ記1：10-22）

「我裸体^{はだか}にて母の胎を出でたり。また裸体^{はだか}にて彼処〔母なる大地の下〕に帰らん。

エホバ与へ、エホバ取り給ふ。エホバの御名は讃むべき哉！」（ヨ

ブ一・二二）

サタンはヨブを妬んで更にこう言った。貴神^{あなた}は彼とその家や所有物の周囲^{まわり}に籬^{さき}を施^{ほどこ}して護^{まも}つたり、することなすことをみんな成就^{あまた}させたりして居られますね。だけど、手を伸べて所有物をうち滅ぼせばきつとあなたの面前^{まへ}で貴方^{あなた}を誑^{おろ}きますよと。これに対してエホバは、では彼のすべての所有物をお前の手に任^{まか}せる。たゞヨブの身体^{からだ}には手を触れるな、と。サタンはみ前^{まへ}を離れて、破壊の仕事にとりかかった。初めはアラビヤのシバ人を唆^{そそ}かして牛、牝驢馬^{めづ}を飼養^{かう}者諸共^{もろ}に奪^うつたり殺したりした。次には神の雷火が降^ふつて羊とその飼養者を焼き滅ぼすように（神のゆるしの許に）サタンが手を下した。次にはカルデヤ人の荒武者が駱駝^{らくだ}を略奪^{りやくだつ}して飼養人を殺すようにした。最後には、長男のところでは兄弟姉妹が宴会を開いていると、忽然と暴風が荒野から吹いて来て、家をうち倒し、みんな下敷きとなって死んでしまふ、というひどいことをやらかした。以上の四段構えの悪業をやつて、それぞれ禍害をまねがれしめた使者をヨブの許へ一人また一人と遣はして報告させた。これを聞いたヨブは起ちあがり、外衣を裂き髪を斬り、地に伏して、右掲の如く告白して聖名を讃えた。決してサタンが言ったように「求むるところあつて」の信仰ではないことをこの一言で美事証した。サタンの負けである。

3月24日

神とサタンとヨブ（下）

（ヨブ記2：1-10）

「^げ実に我ら神より^{さいわい}善福を受くるなれば、^{わざわい}悪禍をも受けざらんや」（ヨ
ブ二・一〇下）

サタンは神のゆるしのもとに、ヨブの子らと所有物をヨブからもぎとってしまった。特に十人の子らを失ったヨブの悲嘆は想像を絶するものである。にも拘らず、「エホバ与へ、エホバ取り給ふ、エホバの聖名は讀むべき哉」とは、どういうことか。かくまで、神を神のゆえに、神のなし給ふことは、何故と問はず、全的にアーメンと言えることは、単なる信仰の域を絶した絶信の信である。

かくして完敗したサタンは更に難問を神に申込んだ。それはヨブ自身を苦しめるに在りというわけで、神にこうたのんだ。「汝の御手を伸べて彼の骨と肉とを撃ち給へ。さらば必ず汝の面に向ひて汝を詛はん」と。神はこれに對して「彼を汝の手に任す、ただ彼の生命は護り置けと。サタンはみ前から退き、ヨブを撃つて全身に悪性の腫物を噴き出させた。ヨブは瓦のかからで身を掻き、灰の中に坐った。妻がこのありさまを見て、神を詛つて死んだ方が優しだと放言した。するとヨブは、右掲の言葉で応えた。ヨブは神一切に生きている。神のなし給うことは人間一切の判断を超えたもの。「最悪も勇者には最善なり」とブラウニングは叫んだが、神を全的に然りとし、おのれを全的に否とし、無としているこのヨブこそ本当の無者で、そこには天来の光が臨む。天来の力がくる。苦しみのどん底で莞爾として微笑むことができる。力まない真の勇者なのである。今回もサタンは敗れた。

3月25日

ヨブおのが生誕を詠う
(ヨブ記3)

○わが生れし日亡び失せよ、男子懷妊れりと言ひし夜も(ヨブ三・三)。

○何ぞ我れ胎より死して出でざりし、何ぞ我れ胎より出でて氣息絶

えざりし(三・二)。

○如何なれば膝ありて我を受けしや、如何なれば乳房ありて我に吸

はしめし(三・二)。

○如何なれば苦しむ者に光与へられ、魂の悩める者に生命臨むや

ヨブ記第一、第二章は、神とサタンの問答の末、ヨブが故なきに苦しめられることとなつたが、ヨブはその苦難に対してただ神を義とし信じ貫いて聖名を讃えた。ヨブは徹底的に神を神のゆえに信じている告白をした。

しかし第二章の終りで、ヨブの災禍を聞いた三人の友が彼を訪ねる。一人はteman人エリバズ、次はshuh人ビルダテ、第三はnaaman人ゾバルでこの三人ともエドムに近親の種族の人と思はれる。ヨブの変り果てた容貌を見て声をあげて泣いた。外衣を裂き塵を頭の上に撒き散らした。七日七夜ヨブと共に坐して一言も発言しなかったが、遂に問答が交される。問答はヨブ対三人のひとりびとりと一巡、二巡、三巡するが、三巡目にはゾバルの代りにエリフというのが現はれる(三・三七章)。しかし三人の友人の言は全部省き、ヨブの言だけを若干とりあげて考えることとするが、読者は勿論ヨブ記そのものを全部読まれたし。右掲の如く第三章全体は一、二章とは全く異なり、おのが生誕を呪う。生れながらの人間ヨブと信仰のヨブとの絶対矛盾の自己同一を見るべきである。

3月26日

ヨブの自己省察
(ヨブ記 6 : 7 ; 9 : 10)

○それ人の地に在るは戦ならずや(ヨブ七・一上)。

○縦ひわれ義しかるともわが口我を罪し、全かるとも我を邪惡とせ

ん(九・二〇)

○わが魂はわが生命を厭ふ、わが苦衷を自らに曝けだし、わが魂の辛酸を語らん(二〇・二)

ここではヨブ記の劇的な対話に於ける主人公の言を中心にして、考えてゆく。彼は理由なくして苦しみに遭ったこと、身内や家畜類を失ったことは何としても懊恨に堪えない。また懊悩は身を蝕む。そのみならず癩のような皮膚の状態はどうしたことか。神がわが生命を絶っていただきたい(六・九)。頑健であった肉体も銅ではない(六・二二)。地上は平和が続かず、個人的には何も恨みがないのに、民族、国家となると戦争が始まる。人生が兵役や戦役のような(七・一上)。生命も氣息のように儂い。幸福もあてにならない(七・七)。しかし魂の眼を神に向けると、神は畏るべき存在だ。論議してみたところで千に一つも返答することができない(九・三)。だから縦い自分は義しいと思っても、罪びとたることを告白せざるを得ない(九・二〇)。こんな生命が何だ。とにかく苦衷を正直に曝け出して、わが魂の辛酸を語ろう(二〇・二)。木石ではないから苦難の意味が知りたい、とヨブは呻く。しかし意味がわかってどうなる。問題の問題は何ぞ。人生の究極は何ぞ。

3月27日

「わが証者は天に在り」

(ヨブ記12:13:14:16:17)

○あらゆる生物の生魂、すべての肉なる人の霊生は彼の御手の中に

在り(ヨブ二・二〇)

○智慧と権能は神に在り、深慮と超悟も神の属なり(ヨブ二・二三)。

○見よ、彼神我を殺さん、我しがみつかざらんや！ げにわが道を

面前に弁ぜん(ヨブ三・一五)。

○それ、木には希望あり、仮令斫らるるともまた芽吹きしてその枝

絶えず(ヨブ二四・七)

○視よ、今にてもわが証者は天に在り、わが立証者高き処に在り(ヨ

ブ一六・一九)。

○わが朋友らはわれを嘲笑者なれど、神に向ひてわが眼は涙を潑ぐ

(ヨブ一六・二〇)。

○彼れ人「我」のため神と論じ、人の子その友「即ち我」の為に弁

護せんことを(ヨブ一六・二二)。

○げに幾許の年来たりなば、不帰の旅路に我れ往かん(ヨブ一六・二三)。

3月27日

「わが証者は天に在り」

(ヨブ記12:13; 14:16; 17)

ヨブとの問答は、往きつ戻りつであり、混沌であり、空転である。人生の根本問題は談議ではない、論議でもない。研究でもなく、話し合いでもない。反対者は友の中に、味方の中にも居る。血縁の中、自分自身の中にもいる。何たるドラマぞ！ 本当の人間は嘲笑、排斥の的となる。かくてヨブも眼を自然界に、そして天に向けた。あらゆる生物の生死は聖手の中にあるを見た。草木は枯れたと思へば、根があつて春と共に芽を吹き復活する。人間はどうなるのか。神は生殺与奪の権を持つ。しかし我れはしがみつくともヨブは叫んでいる。深慮、超悟なる神に信頼せん。ヨブは終に「わが証者は天に在り」と叫んだ。「彼れ、人の子、仲保者（キリスト）」が神と語り、執り成して下さる、と驚くべき消息を預言した。先見した！ 帰らぬ旅路のその前夜ヨブはいかなる靈幻を見たか。

3月28日

「われ知る、われを贖う者は活く」
(ヨブ記19)

○われ知る我を贖ふ者は活く。遂には彼れ土泥つちひぢの上に立ち給はん。

九・二五。

○彼らわが皮膚はだを腐食せしめ、わが肉の離れし後に我れ神を見ん。

九・二六。

○我れ彼をわが身近かに見ん。我見るに他人よそびとならじ、わが腎わらとわが腹はら底ぞこに絶え入るばかり也。(九・二七)。

第十六章の終りで、「わが証者は天に在り」と叫び、仲保者なる「人の子」(メシヤ)を靈視して、魂は確信と希望に燃えたヨブではあったが、第十七章ではその肉体は旧約の一般的限界を出でず、肉体を腐らすものを父と称い、蛆うじを母などと呼ぶヨブであった(二七・一四)。しかし、また第十八章の終りでは、自分の魂の苦悶、弱き者ながら魂のどん底には不変の善意が宿り、底なしの神信頼のあることを右掲の如く不滅の文字として岩盤に刻まれんことを願っている。そういう心ある人が何処かにいないか、誰かいけないかと呻いている。このヨブ記の記者こそその人である。肉体は消え失せようが肉を離れても神を見る、という凄絶な叫びは旧約の限界を突破した! 「われ知る我を贖ふ者は活き給ふ」は正に旧約的次元の突破である。地に立ち給う「人の子」メシヤ、キリストを靈視している。「人の子」を慕い焦がれて彼の「腎は絶え入るばかり」なのである。

3月29日

ヨブの今昔の感

(ヨブ記21:23; 24:26-31)

○見よ、我前進すれど彼在まさず、後退せしも我れ彼れを認め得ず。
左すれどもみ業の彼に目見え、彼れ右に曲り給へるか、されど
見えざりき。(二三・八、九)

○彼は即一なり、誰か彼を変へ得んや。彼のみ魂欲すれば即ち為し
給う。(二三・一三)

○神は活く、わが義審を取り去り、全能者わが魂を辛苦め給う。

三 実にわが衷にわが氣息があり、神の靈息わが鼻の中にある限り、
四 わが唇は不義を何ぞ語らん、何ぞ偽りを述べんや。(ヨブ二七・二一四)

三月二五日以来今日で主人公ヨブの語っている章の序数は全部掲げ終った。さて右掲数句の内容に簡単に触れよう。二三・八、九の前進後退、左右は現行文語訳では東西南北とある。四方を見廻しても神は見えないという。「極楽は東にあらず西に無し、来た(北)道さがせみんな身(南)にあり」という道歌があるが、神はわが身に在りて、キリストの「天国は汝らの内にあり」と同軌。此の如き即身成仏、神我一如に信仰の極意がある。二三・一三で神を即一不変、聖意必現と喝破している。次の「神は活く」とは誓いの表現。ヨブが如何に神の義に即し、誠意を尽して生きたかの叫びである。彼の魂は正直神氣を呼吸していた。

3月30日

エリフの執り成し
(ヨブ記32-37)

○実に夫れ人の中に靈あり、全能力の氣息聰明を与ふ。(ヨブ三二・八)

○神の靈われを造り、全能者の氣息われを活かしむ。(ヨブ三三・四)

○深き睡眠人に臨む夜の夢幻の中にて、また寢床の睡みの時、

彼は人の耳を開き彼らの教えられしものを封印す。(ヨブ三三・二五、二六)

○^三その魂墓穴に近づき、その生命死を齎らす者に近づく折しも、

彼のため天使ありて千に唯一なる執り成す者となり、正道を人

に示さば、

^四彼憐みて言ひ給はん、彼を救ひて墓穴に降らしめざれ、

我れ贖ひ代を得たればなりと。(ヨブ三三・二二-二四)

ここに新たにエリフというヨブと近親の部族の者が登場する。さきの三友人のヨブとの弁論を傍聴していたが、若輩であるので自ら控えていたという(三二・六、七)。

三者の伝統的な罪過と苦難の応報思想を越えて、右掲の如く、神靈の奇しさ創造の力や靈生を強調したり、靈夢の啓示のことを語ったり、神の超越性を謳ったり(三五章)、神讚美を促がしたり(三六章)、神の自然界を通しての威力を語ったり(三七章)しているが、千に一つの仲保的な天使が現はれて、神の憐みが、不可解な苦難のヨブを救贖する消息を告げている右掲のいくだりは注目に価する。これは「我が義は天に在り」と叫んだヨブに照応するもので、エリフは神の出現の先駆として、正に洗礼のヨハネの役割り。



(ヨナ32, 33) エリフの執り成し (テレイカ)

3月31日

神の天地万物

(ヨブ記38—41)

○何の上にその基礎を、また誰か隅の首石^{おや}を置きしや。(ヨブ三八・六)
 ○時に晨の星々^{スル}歎び歌ひ、神の子ら歎呼の声を揚げたり。(三八・七)
 ○汝^キ昂星^{スル}の鏈^{くさり}を結び得るや、参星^{オリオン}の綱を解き得るや。(三八・三二)
 ○汝^キ十二宮^マをその季節に曳^ひき出^ケだし得るや。(三八・三三)
 ○小鳥^{こがらす}共が神に鳴き叫び、食も無くさ迷うときに鴉に餌を与うるは誰ぞや。(三八・四一)

ヨブは神が第一、第二章で認めて居給うように確かに義人であり、縦横無尽の論談を見ても、才気煥発、頭脳明晰、敬虔にして情け深い男でもある。しかし絶大なる神に対して何か大穴がないか。優秀なる者が陥り易いものは何か。知的傲慢である。

終に神自ら顯はれ給うて大風の中からヨブに畳みかけて問いならざる問いをかけた。大地の基礎は何か、隅の首石は誰が置いたか。そのとき晨の星も神の子らも歎呼した。「隅の首石」はキリストの愛したもので、彼自身が人間界の隅の首石と成り給うたからである。スバルもオリオンも大宇宙の創造と神秘な構成の一端を代表しているのだが、スバルは例の七ツ星ブレイアデスであり、参星^{みぎはし}は冬空に輝くオリオン座。十二宮は黄道十二星座(白羊^{おひつ}、金牛^{おしお}、双子^{ふたご}、巨蟹^{かに}、獅子^{しし}、處女^{おとめ}、天秤^{てんびん}、天蠍^{てんせき}、人馬^{いば}、磨羯^{みぎや}、宝瓶^{ほうびん}、双鱼^{ふたぎ})。神は海中、地上のさまざまな動植物や、自然現象にまで言及して、造化の妙の大芸術家たる神の絶大さが表現されている。

4月1日

ヨブの見神

(ヨブ記42: 1-6)

一 ヨブ実存主に答へて曰くニ「我れ知る、汝一切を為し能ふ、意企にして達せざる無し。」

五 我汝のことを耳聞にて聞き居りしが、今や汝をわが眼にて見奉る。
六 故に我れ自らを卑しめ、塵と灰の中にて悔ゆ。(ヨブ四二・一、二、五、六)

今やヨブは、測り知れぬ神の靈知靈能と底知れぬ深慮と思ひやりを知った。それは神自身の聖言に接し、靈光の中に神を靈視し奉ったからであつた。ひとからいかほど神について聞こうとも、そういう間接的なもので魂は撃たれない。神自らの中から発する言は全身にひびく。神自らの靈姿を一瞬見ただけで平伏す、ぶつ倒れる。ダマスコ途上のサウロは復活のキリストに接して完全なぶつ倒された。これが聖靈のバプテスマとなつた。

ヨブも、最早論議の沙汰でないことをからだで知った。あたまでの世界に神は現われない。知識や判断や推論や議論ではない。ヨブの苦難の説明でも解決でもない。苦難のどん底のヨブが神の言を聴き、神を直かに見奉ったから、もう問題は乗り越えられた。理なき苦難を以て験し給うた神の深い願みが身に沁みた。論議を塵芥の如く彼は棄てた。パウロがキリストに出遭つた時正にそうなつたように(エペソ三・八)。地獄が天国に化した。聖前に平伏したヨブの姿を神はこよなく愛し給うた。人生は不可解である。人の世は矛盾と混沌と不義不公平に充ちている。しかし神知り給う、神見給う。いつの日か大逆転が来て、神・キリストから内的靈的變貌を賜る！かくて次元が変り、神・キリストを生き、生命を献げた人が天界で輝く、永遠に。